

ここからが、おせっかい校長の出番である。「来たよ。来たよ。追い風が吹いてるよ。やるよ」「はい、よろしくお願ひします」早速、二次試験の対策に必要なものを確認した。わかったことがある。I先生は、何も持っていない。何もわかっていない。まるっきりイチからである。「これとこれは、義務教育課からダウンロードして。本屋さんに行くのと対策本があるから買ってきて。まずは小論文からね。」

資料もなければ、知識があるわけでもない。だが、I先生が人一倍もっているものがある。それは“謙虚さ”である。誰でも少しはかっこつきたいものである。多少なりともプライドもある。彼は、自分には何もないことを自覚している。何も知らないことをわかっている。これは、ある意味強みである。だから、吸収率が高い。どんどん入っていく。

二次試験の直前対策は、2週間に及んだ。小論文に始まり、模擬授業に面接と、毎晩取り組んだ。小論文は、意外と書けた。本人いわく「書くのは好きなんです」だが、いかんせん知識がない。教育用語がわかっている。そこで、こういう言葉を使うようにとアドバイスした。それは、ここに出ているからと教えた。

模擬授業は、教頭先生が、たまたまI先生と同教科ということで、毎晩3名でトレーニングを行った。I先生の授業は、もともとわるくはない。だが、教員採用試験の二次試験という特殊な状況となると、話は変わってくる。それ専用の対策が必要になる。

模擬授業をやっては、直すべき課題を確認し、また次の日に模擬授業をやる。これを繰り返した結果、2週間でI先生の授業は格段によくなったように思えた。他の先生方も、同じように2週間やってみると、かなり違うのになあと感じてしまった。

そして、面接である。I先生は、しゃべれる人である。とりあえずしゃべるのだが、同じようなことを繰り返す傾向があった。小論文と同じで教育用語が足りないという課題もあった。まずは、想定される質問に対して、その答えを文章で書いてもらった。最初は、当たり前だが不十分であった。そこから練り上げていった。もともと話せるタイプのため、それなりの出来になってきた。

猛特訓最終日、二次試験前日を迎えた。最後の模擬授業を終えた。「最後は勢いだ。何がなんでも教員になるという気持ちを前面に出すことだ」と、シンプルなアドバイスをした。

結果発表の夜、おそろおそろホームページを見た。本人から聞いていた受験番号に自信がなかった。仕方なく、次の日、本人からの結果報告を待つことにした。いつものように、朝、学校の入口に立っていた。I先生の車が校地内に入っていた。

ほどなくして、顔色をなくした彼が近づいてきた。「やっぱりだめだったか」「校長先生、受かりました。校長先生のおかげです。ありがとうございます」「何？もう一度言ってみて」「受かりました。採用試験に受かりました」「そうか。受かったか。おめでとう」私はすでに泣いていた。思わず彼に抱きついていった。本人よりも私のほうが喜んでいた。

彼はというと、全く浮かれる様子もなく、冷静であった。足元は、採用試験前までのサンダルではなく、立派な革靴になっていた。「I先生、足元は大事だよ」彼は、ちゃんと守っていた。「よし、ここからは教員になるトレーニング開始だよ」「よろしくお願ひします」

10月21日の修学旅行の日は、I先生の合格発表の数日後である。彼は、どんな気持ちで生徒たちと過ごしたのだろう。いつだったか、彼は「3年生と一緒に卒業します」と私の前で力強く言った。それを現実のものとした。I先生、やったな。おめでとう。おせっかい校長もうれしい。